

## 高等学校教育研究会 参加報告（英語科）

教諭 高橋 恵

令和元年度 秋田県高等学校教育研究会英語部会 全県大会

大会テーマ：「多様なアプローチから生徒の意欲を高め、発信力を伸ばす授業の工夫」

1 期 日 令和元年11月26日（火）

2 場 所 秋田県立秋田西高等学校

3 大会日程

（1）受付

（2）開会行事

ア．部会長あいさつ 秋田県立大館桂桜高等学校 校長 片岡 俊仁

イ．会場校校長あいさつ 秋田県立秋田西高等学校 校長 佐藤 和実

ウ．日程等の説明、諸連絡

（3）公開授業

コミュニケーション英語Ⅰ 秋田県立男鹿海洋高等学校 海洋科1年

（授業者） 教諭 鎌田 洋子

ALT Pimms Hubbell

コミュニケーション英語Ⅱ 秋田県立秋田西高等学校 普通科2年

（授業者） 教諭 金岡 和恵

（4）研究協議会（授業について）

ア．授業者から

イ．質疑応答

ウ．指導助言 高校教育課 指導主事 佐藤 純一 氏

（5）講演

演題 「モンゴルの英語教育」

講師 秋田大学国際資源学研究科 Batsumber Adiyatumur

（6）閉会行事

ア．副部会長あいさつ 秋田県立由利高等学校 校長 佐藤 緑

イ．諸連絡

#### 4 概要・感想

今大会の研究テーマである生徒の意欲を高めるための「多様なアプローチ」について学べる公開授業であった。2校の授業を参観させてもらったのだが、生徒の状況は違えど、扱っている題材は、どちらも生徒の意欲喚起につながるよう工夫されていたし、何より、生徒がとても積極的に参加している様子が素晴らしかった。先生方が工夫されている点で共通しているのが、「実用的で本物的 (Practical, Authentic)」な題材や課題を示していることだった。日本において、英語使用の場面は非常に限られる。だからこそ、生徒の意欲を喚起し、それを高めるために、授業でいかに「英語使用の必要性」を設定するかが重要となる。その点において、男鹿海洋高校の授業では、実際にペルーの生徒へ送る E メール作成のために男鹿のデータまとめること、秋田西高校の授業では、教科書で扱った内容を発展させて身近な行事や習慣をまとめること、が生徒の英語使用の必然性と結びついて、学習意欲の向上に繋がっていた。自分の授業にも応用できる題材や方法を学ばせてもらった。

指導主事の先生からの助言の中にもあったが、「意欲」を図り、評価するのは難しいかもしれない。けれど、それをもとに展開する「発信」を通して、生徒がより積極的に学びを深められる環境を構築していくことが、私たちに求められている授業力なのだと、実感した一日であった。生徒たち自身が、自ら考える機会をつくり、正確な情報や知識を蓄えながら、「英語」という一つのツールを使って、外の世界に発信していくプロセスを生み出していかなければならない。その一方で、大学入試や検定試験を見据えた、知識としての英語教育も必要となる側面も併せ持っている。英語教育は、まさに過渡期、あるいは変化の時を迎えているわけだが、常に考えておかなければならないのは、目の前の生徒にとって、どんなアプローチが適しているか、何をどのように学ぶことが適切なのか、ではないだろうか。その手立てや材料を絶えず模索することが、私たちにとって必要なことではないかと考える。

後半の講演会では、モンゴルの英語教育の実態を学ぶことができた。「外国語としての英語」を学ぶ、という点において、日本とモンゴルは似通った状況にある。そのため、英語学習においては同じような課題に直面し、その打開策を検討している様子を知ることができた。昨今の日本の英語教育では、「世界で通用する英語話者」の育成を目指し、環境を整え、学習を充実させることを目標にしているが、モンゴルの状況も似ているようだ。これらの課題を国全体で改善していくとする取り組みは望ましいものであるが、やはり所々の課題を解決しながら進めていく必要があるため、教育現場での取り組みで工夫が必要な点も共通した話題であった。

近いようで遠い国、と思っていたモンゴルであったが、こうした機会を得て、以前よりも身近に感じる事ができた。また、同じような課題をもつ国々が協議し合える環境があれば、様々な打開策を見出し、実践できる機会が増えるだろうと感じた。